

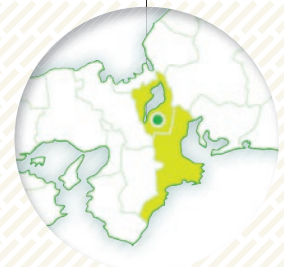
地方の常識

地域特性を活かした独自規格

第10回

高速道路に故郷の木が戻る

地域性苗木



名

古屋市で条約締結国会議(COP10)が開かれる今年、生物多様性への

関心が高まっている。施工現場に固有の生態系を残すための地道な努力が、高速道路

の建設時にも払われているのをご存じだろうか。

滋賀県湖南市にある緑化技術センターでは、全国の高速道路建設予定地に自生する

樹木から種子を採取し、二元

の地域に苗木として戻すための育成を行っている。かつて中央分離帯に植える樹木を生産していた広い施設を活かし、東北から近畿に至る約200種の苗木を育て、これまでに約75万本を出荷した。構内のビニールハウスでは、樹種と事務所別に整理された苗木が一面に育っていた(写真1)。

自然環境を保全する試

みは今や珍しくないが、地域性苗木は大規模な高速道路の需要に対応できるだけの苗木の数と樹種の両方を揃える集中管理に

特徴がある。緑化技術センターで種子から栽培することにより、遺伝子レベルまで

考慮した生態系保全が可能になる。また、市場で取り扱わない希少種を栽培することもできる。こうした取組みが評価され、地域性苗木は2009(平成21)年度土木学会環境賞を受賞した。

新名神高速道路の鈴鹿トンネル東坑

口付近(三重県亀山市)では地域性苗木を利用した自然環境復元工事が施工された。鈴鹿国定公園内の豊かな自然環境への影響をできる限り抑えるため、トンネルズリ(掘削土)を用いた河川の付け替え区域に地域性苗木を植付ける工法が採用された。

施工箇所は新名神の橋梁下にひっそりとたざずんでいる(写真2)。アオダモやイ

ズセリヨウなど約1万4000本の地域性苗木を植えてから2年が経過した現場では、小さなカエルが跳ねていた。現在は若い苗木に生分解性プラスチックのカバーをかぶせてシカの食害から保護し、



写真2 地域性苗木やトンネルズリで復元された鈴鹿トンネル東坑口付近

森を復元している最中だという。こうした試みによってつくられる自然環境が復元されるには、少なくとも今後5年から10年を要する。

残念ながら新名神を走行する車内からこの現場を眺めることはできないが、運転中わき見にならない範囲で法面の緑に目をやってみるのも面白い。植生が周囲の環境と調和していたら、あるいは気づかないほど一体化していれば、それは順調に育った地域性苗木かもしれない。

松田 曜子 編集委員
(取材協力：中日本高速道路(株)・(株)高速道路総合技術研究所緑化技術センター)



写真1 静岡工事事務所工区で採取した種子から育てたアラカシの苗